

● ウラシマソウの観察

春の林床で目立つ植物の一つにウラシマソウが挙げられます。

葉は濃い緑色で鳥足状の複葉。葉の下に隠れるように面白い花を付けます。花序は仏炎苞に包まれ、花序の先は長く伸びて釣り竿(糸)のようです。それで浦島太郎にちなんで“ウラシマソウ”の名前があります。

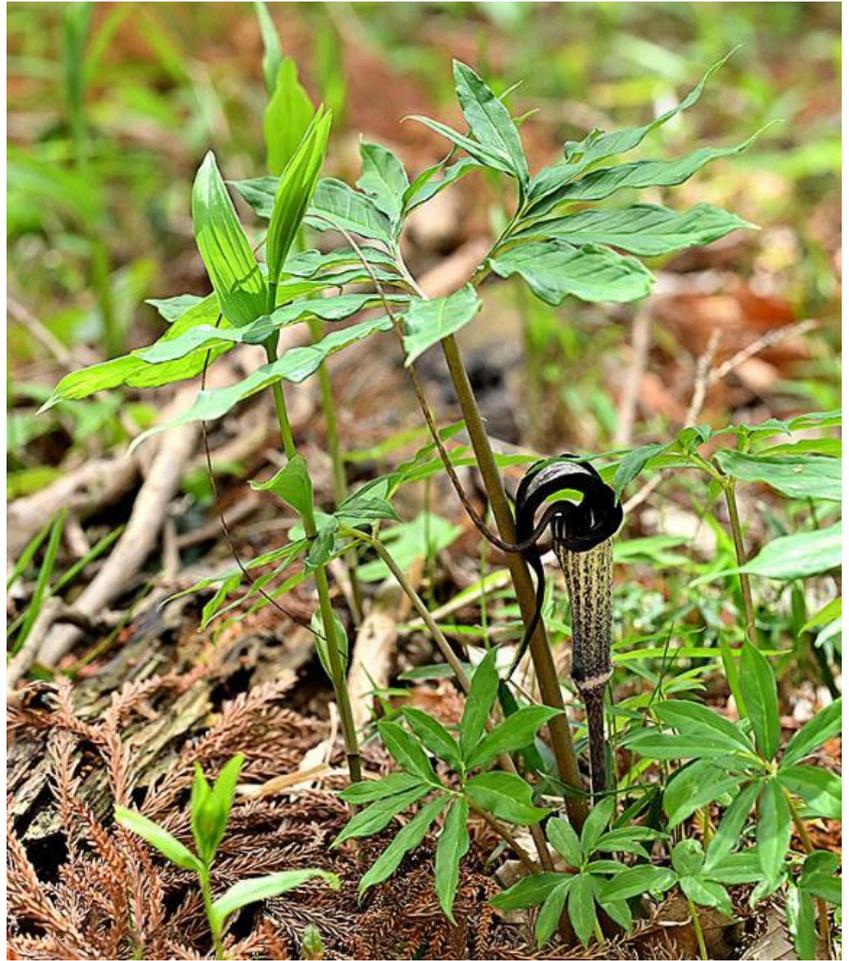
スギ林の林床にウラシマソウが群生しています。

2~3人のグループになって、じっくり観察することにしてきましょう。

まず仏炎苞の開口部を少し開いてみましょう。傷つけないようにていねいをお願いします。

苞の中に白い柱(付属体)がありますね。その下部にあるのが花序です(肉穂花序)。

どんな花が見られるでしょうか。



まず仏炎苞の開口部を少し開いてみましょう。傷つけないようにていねいをお願いします。

中の白い柱(付属体)の下部にどんな花が見られるでしょうか。

雌株か雄株かは、一般的には、大型の株が雌株でしたね。

ウラシマソウは、栄養状態で性転換することが知られています。今年たくさんの実を付けて、養分をたくさん消費した雌株は、翌年雄株に性転換することがあります。毎年継続観察するとおもしろいです。



ウラシマソウの雄花序



ウラシマソウの雌花序



雄株では苞の基部にすき間がある



雌株ではすき間がない

緑色の粒が見られたら雌花です。

紫褐色で先に粉のようなものが付いていたら雄花です。

さらに仏炎苞の下部の柄の近くにすき間(穴状)があるのを確認してください。

雄株にはわずかにすき間がありますね。これは訪花した虫の出口です。

受粉の仕組みを考えてみましょう。

ウラシマソウは仏炎苞からきのこの匂いを発しているようで、キノコバエが匂いに惹かれてやってきます。キノコバエは仏炎苞の開口部から潜り込み、蜜を求めて花の上を動き回ります。その時に雄株では花粉をたくさんつけてしまいます。そのあと、出口を探して基部の穴から外へ出ます。

このキノコバエはまた別の株(雌株)の匂いに惹かれて入ります。この株が雌株なら、雌花の上を動き回り受粉させます。しかし外に出ようとしても、雌株の仏炎苞には出口はありません。この中で死んでしまいます。時々、雌株の仏炎苞にはキノコバエの死体が見られます。

※ 特定の種のキノコバエは雌株から脱出することが確認されています。

ところで、仏炎苞の長く伸びた“釣り竿”は何のためにあるのでしょうか。どうやらキノコバエを呼ぶ秘密が、この釣り竿(糸)にあるようです。

実際に釣り竿を除去して調べた実験では、生じる実の数に違いがありました。釣り竿は魚ではなく、キノコバエを釣っていたのですね。(村田威夫)